
みんな、ひとり？

落合 森

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

みんな、ひとり？

【Nコード】

N4997D

【作者名】

落合 森

【あらすじ】

連作短編。偶然の出会い、すれちがいのなかで、心通わせる5つのストーリー。決して分かり合うことなんてできないから、互いに信じ合えないからこそ、心を通わせることを大切にしたい、そんな物語です。

みんな、ひとり？

夕方のひと

そのひとは顔を見ればよく知っているはずなのに、いったいだれだったのか、まるで思い出せない。

いかにも休日らしく、化粧もほとんどしないまま、ポロシャツとジーンズ姿でスーパーのカゴを提げ、ちょっと近所まで買い物にきました、といういでたちだ。

幸雄が知り合う機会のある大人の女性といえば、学校や塾の先生か、友だちのお母さんぐらいのものだ。しかも二十代の女性となると、さらに限られてくる。そのなかに思い当たるひとはひとりもいなかった。

それでも、なんとか思いだそうと考え込んでいたら「幸雄、前」と、レジの列が進んでいるのを注意された。

今日は、マンガを買ってもらう代わりに荷物持ちをする約束で、母親とショッピングセンターの買い物につきあわされているのだ。そして、そのひとは隣のレジに並んでいた。

「どうしたの。だれか知ってるひとでもいた？」

幸雄は自分が若い女性をじっと見ていたことを、母親に見とがめられたんじゃないかと思った。

「ううん、なんでもない。ちょっとね」

なんだか照れくさくなつて慌てて首を振ると、幸雄は買い物カゴをレジの台の上に載せた。

それにしても、いったいだれだったっけ。もしかして、知り合いに似てるだけで、じつは別人なんだろうか。あるいは、どこか芸能人に似ていて、それで知っているような気がするだけなのかもしれない。それとも、ほんとうにテレビに出ているタレントだったりして。

だけど、どうもそんな感じじゃない。ぜったいに知っているひただ。どこかで会ったことがあるのは確かなのだ。それがどこだった

みんな、ひとり？

みんな、ひとり？

のか、思い出すことはできないけれど。

幸雄は、母親に気づかれてしまうのが恥ずかしくて、あまりじろじろと見つめるわけにもいかなかった。今度は、横目を使って、こっそりと確かめる。買った商品をレジ袋に入れながらも考えつづけていたら、玉子のパックをいちばん下に入れそうになって、また、母親から注意されてしまった。

結局、店を出るまで、それがだれだったのか思い出すことはできなかった。それに、向こうは幸雄のことなど、まるで気にもしていないみたいだ。

知り合いだと思ったんだけど、やっぱり気のせいだったのかな。それでも、気になってしょうがない。

「ねえ、お母さん」

幸雄は、どんなささいな情報でも手に入れたくて、こうなったら手がかりを得るためなら恥ずかしいのも我慢して、思い切って聞いてみた。

「さつき、隣のレジに並んでた青いポロシャツ着てたひと、見覚えがない？」

「そう言われても、分からないなあ。でも、お母さん、知ってるひとだったら、あいさつぐらいしてるわよ」

確かに。そう言われれば、そのとおりだ。

母親と一緒に買い物に来ていちばんいやなのが、知り合いを見つけると、通路の真ん中だろうと、寒くて震えてしまいそうな冷凍食品コーナーの前だろうとおかまいなしに、かならず立ち話を始めることだった。

その間、幸雄は所在なく、買い物カゴを持ったまま、とりにつつ立っていないければならない。おまけにそんなときには、たいてい「まったくうちの子は」なんて言いだして、幸雄の話題を持ち出すものだから、恥ずかしくてたまらない。

いつも決まってそんなだから、もしも、母親が知っていたなら、たとえ、隣のレジに並んでいようと、声をかけていないわけがない。

みんな、ひとり？

やっぱり、気のせいだったのか。

「でも、きれいなひとだったわね、幸雄はああゆうひとがタイプなんだ？」

しかし、母親は幸雄の態度には気付いていたのだ。冷やかすようにそう言われると、そんなつもりは全然なかったのに、幸雄は自分でも耳まで赤くなってくるのが分かった。

「なに言ってるんだよ、そんなわけないだろ」

「ああ、玉子が割れちゃう、ごめんごめん、冗談だよ」

照れ隠しに幸雄が買い物袋を乱暴に振り回すと、母親はあわてて謝ったが、その声はどこか楽しげに聞こえる。

そして、幸雄は、まだあのひとがいつたいたれたったのかを、なんとか思い出そうとしていた。いちど頭の片隅にひっかかってしまつと、どうしても気になって、その謎は、まるで靴底に張り付いただれかが吐き捨てたチューインガムのカスみたいにいっつまでもついて回って、なかなか剥がし取ることができなかった。

その日はそれから、ごはんを食べていても、テレビを見ても、お風呂に入っても、夜、寝るときまで、ずっと考えつづけて、あともうすこし、というところまで行っているような気はするのだけど、結局、思い出すことはできなかった。

もしかしたら、夢にまで見て、そこですべてが解決するかもしれないとさえ願っていたけど、そんな淡い期待も叶うことはなく、幸雄はその晩、夢も見ないほどにぐっすりと眠ってしまった。

幸雄は週に三日、隣町まで塾に通っている。

五年生になると、クラスの半分は塾や習い事に通うようになっていた。そうでないものも、野球やサッカーのクラブの練習に明け暮れ、放課後とくに予定もなく時間を気にせず遊びまわれるという友だちはいなくなった。

みんな、ひとり？

もちろん幸雄自身も、四月からは学習塾に通っている。

塾を選ぶときには、学校の友だちも多く通っている駅前の塾にしようかと迷ったけれど、遊びに行くわけではないのだという親の意見に、幸雄もそのとおりだと思い、隣町にある個別指導で定評のある有名進学塾に決めたのだ。

塾へ向かう途中に通る、商店街の角を曲がった先の駅への抜け道では、いつもよくすれちがうひとがいる。

なんだ、そうだったのか。

この前の週末、ショッピングセンターで隣のレジに並んでいたのは、そのひとだった。

幸雄は、ここ数日、ずっと頭の片隅にこびりついたまま、引っかかりつづけていた疑問が突然に解けると、じつにすっきりとした気分で自転車のペダルさえ軽くなったように感じられた。

いつも、仕事帰りのスーツ姿しか見たことがなかったので、髪を下ろしてジーンズを履いた姿が、記憶と結びつかなかったのだ。

わかってしまえば、ほんとうにあっけない。

それにしても、と幸雄は思う。週に三日の塾に通う日に、しかも、ときどき路地ですれちがうだけなのに、われながら、よく顔まで覚えていたものだ。

幸雄は、これまで、そのひとを特別に意識していたというわけではない。ただ、自転車ですれちがうときに、いつものよく会うひとだと思っただけで、それ以上の興味も関心も持つてはいなかった。

だからこそ、ショッピングセンターで見かけても、いったいだれなのか分からずに、あげく、何日も悩みつづけるはめになったのだ。それが、こうして結びついたことで、幸雄はあらためて、これまでは想像すらしなかった彼女のちがった一面を知ったような気がしていた。

いままでは、疲れた顔をして駅から無表情に歩いてくる、大勢のなかのひとりに過ぎなかった。だけど、あのひとだって、自分と同

みんな、ひとり？

じように買い物に行ったり、毎日、ごはんを食べたり、音楽を聴いたり、テレビを見ては泣いたり笑ったりして暮らしているんだ。

そんな、当たり前前にことに気がついたのだ。

それは幸雄にとって、これまで考えてみたこともない、すごい発見だった。

そのうえ、たとえば、仕事で失敗をして泣きたいようなことがあったとしても、家でどれだけ楽しいことが待っていたとしても、駅から帰る道では、きつと、なにこともなかったかのような顔をして歩いてこなければならぬのだから。まったく、おとなもなかなか、たいへんだ。

そんなことを考えているうちに、幸雄は、いつのまにかほんのすこしだけ、彼女に親しみの気持ちを抱くようになっていた。向こうは自分のことなんか、まったく気づいてもいないかもしれないのに。

幸雄は、もともと勉強はできるほうだったので、塾へ通うことを、それほど苦痛に感じてはいなかった。

なによりも、わざわざ隣町まで出かけることで気分が変わることも、幸雄は気に入っていた。隣の塾には、友だちはいなかったけれど、その分かえって勉強だけに集中することができたし、塾の勉強は分かり始めると、難しい分だけ学校の授業よりもおもしろかった。だから、塾に友だちがいなくても、べつに寂しいと感じることだってなかった。

そんな幸雄に、新しい楽しみができた。

駅への抜け道ですれちがう、あのひとのことをもつとよく知るようになることだ。

もともと、住宅街の中の抜け道を使うひとはあまりいない。いつもこの道ですれちがうひとは、だいたい決まっている。あの女のひとのほかには、いままでにも二、三人しか見かけたことはなかった。その中でも、ほぼいつも決まった時間にすれちがうのは、あの女の

ひとだけだ。

幸雄は、塾に向かう途中、路地の向こうから歩いてくる人影に気をつけて、相手確かめるようになっていた。

そして、それはたいていあのひとだった。

幸雄は彼女のほんのささいな変化も見逃さないようにと注意して、そこらなにかの意味を見つけ出そうとしていた。そうしてみるといままでは、いつも同じようにしか思っていなかった彼女の持ち物や服装にも、幸雄は変化を見つけられるようになっていった。

スーツは同じように見えるけど、じつは、すこしずつデザインのがうものを三着は持っているらしい、とか、最近はコートを着るようになったけど、あれは今年になってから新調したものだろうかとか。ふだんは、歩きやすそうな革靴を履いているのに、月に一日か、二日だけは、ヒールの高い靴を履いていることがあって、その日は化粧の感じもすこしだけちがって見えるような気がする、とか。

そして、幸雄は、そうしたほんのちよつとした変化を見つけると、塾へ着くまでの間に、それぞれに、ふさわしい物語を思い描いてみるのだ。

幸雄は、心の中で彼女のことを「新人OL」と呼ぶことにした。

まずなによりも、名前がないのはなんとも不便だ。それで、服装や見た目の年齢から、きつと新入社員のOLにちがいないと思ひ、そう呼ぶことに決めたのだ。でも、ほんとうに新入社員なのか、そもそもOLなのかどうかさえも、じつのところあやしかったのだけだ。

いったいどんな仕事をしているのか。家族と暮らしているのか、一人暮らしなのか。とてもそうは見えないけれど、もしかしたら結婚して子供がいるということだって、ありえないわけじゃない。

みんな、ひとり？

みんな、ひとり？

若そうに見えるけど実際の年齢はいくつなのだろう。正直なところ、小学五年生から見れば二十歳と三十歳のちがいさえ、ほんとうは、はつきりとはしなかった。

でも、幸雄はそんなわかるはずもないことを、いろいろと空想するのが楽しみになっていた。ある日、彼女が菓子がいっぱい詰まったコンビニの袋を提げて帰ってきたときには、もしかして、仕事で失敗して上司に叱られ、落ち込んでやけ食いでもするつもりなのではないだろうか、そのときはきつと、すべてのお菓子を順に並べた前に正座して、もう食べきれなくなるまで、ずっと食べ続けるにちがいない、などと、ときに妄想のような内容にまで発展していくのだ。

それにしても、幸雄は彼女のことを、じつはなにひとつ知りはしなかった。

もちろん、結局のところ、いくら想像してみたところだけでっしてたどり着くことはないのだという、あきらめにも似た気持ちも幸雄にはあった。

テレビやマンガでは、よく名探偵や刑事が、ちよつとしたきつかけを元にして、誰かが隠している秘密や真実を言い当てたりするけれど、現実にそんな都合のいい話は、そうそうあるもんじゃない。実際、幸雄だって半年以上もすれちがい続けていながら、彼女について分かった確かなことなど、なにひとつなかったのだから。もっとも、その分、自由で無責任な妄想を繰り広げてもらわれるわけだ。

そんな「新人OL」チェックは、すっかり、塾へ行く途中の幸雄の日課になっていた。

たまにすれちがわない日があると、次の塾の日まで、なにか忘れ物でもしてしまったような気分になる。逆に、ちよつとも変化や新しい発見があると、幸雄は彼女のことを、すこしだけ理解することができたように思えた。それでも、いろいろとその理由を考え始

めると、じつはなにも知らないということが、よけいにはつきりするだけだった。

近頃は、すっかり日が短くなって、塾に向かう時刻には、西の空が赤く染まりだす。幸雄はちょうど夕日に向かって、隣町まで自転車をこぐ。

夕暮れの町は、まるで影絵の背景みたいだ。まだ明るさの残る空を、住宅の屋根が切り紙細工みたいにぎざぎざとした真つ黒な輪郭で縁取っている。それでいて、景色は妙にあいまいで、うすぼんやりとじんじりしてしまう。街灯の明かりは、そんな夕暮れをよけいに眠たく見せるばかりで、買い物帰りのおばさんも、駅から列をなして歩いてくる会社員のお父さんたちも、みんな顔をなくした影法師みたいになって、近くまで来てようやくその表情が分かる、といった具合だ。

夕暮れのなかで自転車をこいでいると、指の先から白くふやけてしまい、いったいどこまでが自分でどこからが湯なのかもはつきりとわからなくなってくる、ぬるい風呂にでもつかっているような気分になってくる。そんなとき、幸雄は自転車をこぎながら、なぜかこのままどこにも着かなければいいのと思う。

べつに、塾へ行くのがいやだというわけじゃない。なんとなくあいまいで、だれもが、だれでもなくなってしまうようなこんな時間に、いつまでも漂っていたくなるのだ。

だけど、いつも、夜はすぐにやってきてしまうので、そんな気分が長続きすることもないのだけれど。

みんな、ひとり？

駅からの抜け道の路地に入ると、今日も「新人OL」は、やってきた。夕暮れの中、顔はよく見えなくても、幸雄はもう背格好だけで彼女を見分けることができる。あまりじろじろ見ていると思われ

みんな、ひとり？

ないように、目の端の方だけで観察をする。

いつものコートと小さめのバッグ、ふだんと変わったところはない。

もう少しですれちがうという距離、彼女はちょうど街灯の下だ。

幸雄は彼女の顔を横目でチラッと見る。

そこにあるのは 笑顔だった。

彼女はともうれしそうな、満面の笑みを浮かべていた。ひと目見ただけで幸せな気持ちが伝わってきて、幸雄はまるで自分まで、なんだか、いいことがあったような気がしてきた。

もちろん、その笑顔は幸雄に向けられているわけではない。それでも彼女は、まっすぐに前を向いたまま、ほんとうに幸せそうな笑顔を浮かべて歩いていった。

これまでに、こんなことは一度もなかった。ふつう、大人は無表情で歩くものだと思っていた。どんなに悲しいことがあっても、うれしいことがあっても、ひとりで道を歩きながら泣いたり笑ったりすることなんか、けっしてしない。

彼女だって、これまでは無表情を装って、すこしうつむき加減に毎日毎日、まるでなにごともないかのように、この路地を通り過ぎてきたはずだ。涙がこぼれそうでも我慢をして、うんざりした気分の日でも不満が顔に現われないように気をつけて、たとえどんなに楽しいことを思い出しても、そんな気持ちは噛み殺しながら、家への道を急いでいたはずだ。もちろん、あの「やけ食いの日」だって「ハイヒールの日」だって。

それが、今日に限っては、ちがっていた。

そして幸雄は、笑顔だけで、こんなにも他人の気持ちが伝わってくるものなのかと驚いていた。眺めているだけで、まるで、彼女の中にある喜びそのものが幸雄の心にも伝わってくるみたいだ。幸雄は、その笑顔から、いつまでも目が離せなかった。

そんな視線に気づいたのか、「新人OL」も幸雄を見た。

一瞬、目が合うと、彼女はほんのすこし恥ずかしそうに、笑顔を

隠そうとしたけど、それでも微笑みまで消えてしまうことはなかった。彼女はすこしうつむいて、くちびるの端に喜びの表情を残したまま、幸雄の横を通り過ぎて行った。

すれちがってから、しばらくしても、路地には彼女の幸せな気分が漂っているような気がした。それに、ふだんの幸雄なら、あれこれと推理を始めるところなのだけど、今日はなぜか、彼女の笑顔の理由を想像しようという気にはならなかった。

もう、理由なんかはどうでもいいと思った。彼女は、今夜はとも幸せな気分でいることが十分にわかったのだから。それに比べればこれまでいろいろと幸雄が空想してきたことなんて、まるでどうでもいいようなことばかりに思えてくる。

幸雄は今日、彼女について、やっとひとつだけ確かなことが分かった。彼女の心の中にある、ほんとうの気持ちに触れることができたのだ。

いつのまにか、幸雄もつられて笑顔になっていた。

すでに夕空の残照も消え、茜色だった空の端は、もうすっかり深い紫色から、濃紺へと染まっていく。幸雄は自転車のヘッドライトを灯すと、すこし重くなったペダルを、勢いをつけて踏み込んだ。

今度会ったときは、彼女に挨拶を試みようかな、と考えながら。

うそつき

社交辞令は苦手だ。田中浩子は、これまでも言葉を額面どおりに受け取っては、何度もいやな思いをしてきた。

「まずいよ、試験範囲終わってないよ、昨日もラジオの深夜放送、聴いちゃってさ」

寝不足の顔で、今日子は開口いちばん、弱音を吐く。すると、優子がすかさず、それに応える。

「でもさ、今日子はちゃんとノート取ってるじゃない、わたしなんか、英語だけで、日本史ぜんぜんやってないもん。浩子はバツチリ？」

「うーん、ひととおりはやったけどさあ、でも教科書流しただけだから」

「さすが、浩子はまじめだねえ」

ふたりは声をそろえて、浩子を誉める。これはもう、彼女たちの間では、決まり文句みたいなものになっていた。

そう言われると、浩子は照れくさい気もするのだけど、ほんとうは、そんなにまじめってわけでもないし、まじめ、という評価もなんだか誉められてるわけじゃないような感じもする。それでも、友だちの言葉として、ここは謙虚に受けとめておこう。

「へへへ、そうかなあ。それほどでもないよー」

今日子と優子は、そんな浩子の反応を見て笑う。

「でも、まだ悪あがきするから、早めに教室行こうよ」

浩子は、ふたりを急かすと、通学路を急いだ。

試験が終わった帰り道でも、今日子と優子は全滅だーと悲愴な声をあげるのだ。そして、浩子にも結果についての意見を求めてくる。浩子はいつも、正直に六、七割のできではなかったかと申告すると、

みんな、ひとり？

みんな、ひとり？

「やっぱり、さすが」などとおだてられる。おだてられると悪い気はしないので、浩子は照れながらも、つつい、へらへらとしてしまふ。

それにしても、このふたりがうらやましい、と浩子はいつも思っていた。もともと心配性な自分は、試験勉強でも計画を立てそのとおりにはしないとられない。いきあたりばったりということができないのだ。要領が悪いというか、不器用というか、融通がきかないというか、つまりは小心者なのだ。それに比べて、今日子たちは奔放で自由気ままにふるまっているように見える。

高校に入ってから、そんなふたりと友だちになれてほんとはよかった。わたしたちは親友だ。答案が返ってくれば、お互いに点数だつて隠さずに見せ合うぐらいだ。

でも、ふたりは試験の直前も直後も、まるでできなかつたようなことを言つてたはずなのに、成績はなぜか浩子と変わらないか、むしろよいぐらいだった。それが浩子はどうにも不思議でならなかつた。

いったいふたりはいつの間にも勉強しているんだろう。そんな疑問を抱いてしまうことが、自分の要領の悪さを証明しているようにも思えたし、彼女たちの言葉を信じていないようで、申し訳ない気分にはさえない。

ただ、それが試験のたびに繰り返されるので、浩子はとうとう我慢できなくなつて、ふたりに聞いてみようと思つた。ちょうど、英語の答案が返ってきたばかりだ。マクドナルドでお互いの点数を比べてみると、やはり、ふたりとも点数は浩子よりほんのすこしだけ上だった。試験前にはまるでやっついていないと言つていたはずなのに。

浩子の心のどこかには、親友なのに、どうしてほんとうのことを言ってくれないんだろうという思いが生まれかけていた。自分は、これまでだつて、なんでも正直に打ち明けてきたのに。

みんな、ひとり？

「ねえ、今日子ちゃんたちさあ、いったいいつ勉強してるの？ なんかすごいよね、試験前も全然やってないで、わたしより点数いいんだもん」

浩子はできるだけ厭味にならないよう注意しながら、言葉を選び、声の調子だつて精一杯明るく聞こえるように気をつけた。

「えー、そんなこといつてもねえ。なんとなくだよ」

そう言うと、今日子と優子は、互いに顔を見合わせて笑った。浩子はそれが、ふたりが自分に対してまじめだからと言った後の笑い方と似ているような気がした。

なんとなく、じゃあ納得がいかない。でも浩子は、ここでもう一步踏み込んで、さらに質問をつづけてはいけないような気がした。

「なんだか、自分だけが仲間はずれにされているような気分だ。わたしたち親友だよ、と念を押したくなるのを、ぐっところらえて、浩子はシェイクのストローを吸った。」

「なんだか、ふたりが急に遠ざかって行くみたいなのがする。」

「あー、ごめん。今日、お母さんが出かけるんで留守番頼まれてたの忘れてた。いま何時だろ、もう行かなきゃ」

浩子は、なんとなく居心地が悪くて逃げ出したいような気持ちになつてきて、とっさに嘘をついてしまった。

「えー、そうなの。じゃあ、わたしたち、まだいるね」

「うん、いて。ごめんね、お先。また、明日、学校でね」

ふたりはにこにこしながら、浩子に手を振る。浩子も、明るく「じゃあね」と言って席を立った。

今日子たちと別れて、ひとり家路についていると、浩子はなぜかわけもなく泣きたくなってきた。思わず涙がこぼれてしまいそうだ。なんだか急に、とつても寂しくなってしまったのだ。

とうとう我慢できずに、めそめそしながら歩いていると、ときどきすれちがうひとたちは、驚いたような顔をして泣いている浩子の顔をじつと見つめたり、ぜったい気づいているにちがいないのに、

みんな、ひとり？

まるで気にもとめていないようなふりをして通りすぎていく。そのどちらの反応も、いまの浩子にとってはありがたいような、わずらわしいような気分だ。それでも、そんな風にめそめそと歩いているうちに、浩子の気持ちも、だいぶ落ち着いてきた。わけもなく寂しくなってしまった気分も、だいぶ薄れてきたようだ。でも、目はひどく腫れていて、たったいままで泣いていたことはバレバレだ。

こんな顔で家に帰ったら、今度は、お母さんから根掘り葉掘り聞かれることになる。コンビニで立ち読みでもして、まぶたの腫れが引くのを待つてから帰ろう。家の近くのコンビニに寄っていいところ。ついでにそこで目薬も買えばいい。

街道沿いにあるサンクスに入ると、そこにはすでにもうひとり、浩子と同じ制服を着た女子高生がいた。

同じ中学から高校に進学してきた同級生の浦河みどりだ。中学時代にはほとんど口を利いたことがなく、高校で同じクラスになって初めてちゃんと会話を交わしたのだけど、どこかこわい感じがするというか、浩子とはちがって、ひとりでも強く生きていけそうなタイプだ。そんなところを浩子は、すこし苦手に思っていて、仲がよいというほどではなかった。

雑誌売り場に向かおうとして、足が止まってしまった浩子に、浦河さんのほうから声をかけてきた。

「どうしたの田中、泣いてんじゃない。テスト、そんなにひどかったの」

いきなり、なんの遠慮もない。それに、テストの点だって、泣きたいほど悪かったわけじゃない、失礼しちゃう。それでもそんな、なにも取り繕いもしない浦河さんの態度が、いまの浩子にはなぜか、かえって心地よく感じた。

「そんなでもないよ。自分でもよくわかんないけど、涙が出ちゃって。コンタクトかな」

浩子は、てきとうにごまかしてみたが、理由を聞かれてあらため

みんな、ひとり？

て考えてみると、自分でもなんで泣いていたのか、じつはよく分らなかった。

「ふーん、まあいいけど。田中さあ、すこしは友だち選んだほうがいいよ」

え、なんだろう、いきなり。それって大きなお世話？

「あんまりさあ、ひとの顔色うかがったり、周りの目ばかり気にかけてると、うざがられるよ。そういうの、得意そうじゃないのに。まあ、わたしには関係ないけどさ」

浩子はどこからか、今日子たちのくすくす笑う声が聞こえてきたような気がした。でも、そんなのは気のせいだ。それにしても、このひとはなんでそんなこと言っただろう。

「えー、そうかなあ。でも、忠告してくれて、ありがとう」

浩子の答えに、浦河さんは、ふうとため息をひとつついた。

「ほら、それだよ。ふつう怒れよ。せめて、同じこと言っんでも、もうすこしいやみつたらしく言っただろうがいいよ。なめられちゃうよ、そんなんじゃない。ま、いいけどさ」

浦河さんは言いたいことだけ言うと、もうどうでもいいとでもいうかのようになんて返事をしたらいいのか困っている浩子を置いて、さっさと行ってしまった。

浩子は置いてきぼりにされ、ぼうぜんとして立ち尽くしていた。

いったい、いまのはなんだったんだろう。いやがらせかな。でも、浦河さんはそんな感じのひとじゃないし。浩子のために言ってくれていることのように思えた。

しばらく、ひとりで週刊誌のページをめくっていたが、記事の内容なんてまったく頭には入ってこない。浩子は、浦河さんの言ったことばかりを考えていた。

それにしても、友だちっていったいなんなんだろう。どこまでが友だちで、どこからが友だちじゃないのだろう。今日子たちは友だちだけど、浦河さんは友だちになるのだろうか、などと。

けれど、そのうちだんだんバカらしくなってきた、そんなことは、

みんな、ひとり？

どうでもいいように思えてきた。立ち読みしていた週刊誌もろくに読み進まないまま棚に戻すと、充血に効く、とパッケージに大きく書かれた目薬を選んで、レジへと持って行く。すぐ表の駐車場で点そうと上を向いたら、そこには真っ青な空が広がっていた。小さな雲が、ひとつだけ離れたところに浮かんでいるのが、まるで自分みたいだと思っただけ離れていると、だんだん薄くなって消えていってしまった。それがなんだかおかしくて、浩子はずいぶんとすっきりした気持ちになって、足取りも軽く家へと歩き出していた。

結局、浩子はその後も今日子たちのグループから離れることもなく、浦河さんといままで以上に親密になることもないまま、同じような毎日を繰り返しては、高校生活の三年間を過ごすことになるのだ。

高校を卒業すると、しだいに今日子たちや浦河さんとも連絡を取り合うことはなくなっていった。浩子は、短大に入っても、新しい友だちと似たようなつきあい方をして、たぶん周りからも、高校時代と似たような評価をされているのだろうと思うようになった。

それは就職しても、あまり変わることはなかったみたいだ。

それでも、世の中にはどうやら社交辞令というものがあって、なんでもかんでも額面どおりに受け取ってしまったり、ほんとうのことを言ってしまうと、ひとを傷つけたり、自分が傷ついてしまうこともあるのだということ、浩子にもなんとなく分かるようにはなってきた。

ただ、そういう気の使い方をするのは相変わらず苦手だったし、思ったこともすぐ顔に表れてしまうのだけだ。

会社に入ってから、同期の女子社員同士のランチの誘いや、お

みんな、ひとり？

茶やお菓子の当番を決めるとき、みんなはいつたどこまでが本心なのか、浩子にはまるで見当がつかなかった。遠慮したほうがいいのか積極的になるべきなのか、その場でいったいどう振舞えばいいのか、いつもいまひとつ自信が持てないでいた。

それでいて、浩子はいまだに自分の気持ちだけは、どうやらすぐ表情に出してしまうらしい。できるだけ無表情を装おうと心がけているのに、うれしいことやいやなことがあると、どうしても、すぐに反応してしまうのだ。

「で、浩子はどうする？」

ランチサービスのアイスティーのグラスに残った氷を、ストローで回しながら、同期入社の子石井由美が聞いてきた。

「でも、わたし、行ってもいいのかな」

「いいに決まってるじゃない。来なよ」

今日の帰り、営業所の女子社員同士で、雑誌に載っていたベトナム料理店に行くという。その話題は浩子も午前中に耳にして、少しうらやましく思っていたのだけど、いざ誘われると、今度は自分が気をつかってしまい、結局は楽しめないんじゃないかと迷っていた。「じゃ、決まりね。桜子と吉野さんで、四人で予約しとくから」

浩子が迷ってぐずぐずしていると、由美はいつもどどん話を決めていつてくれる。そんなところを浩子はありがたく思っていたし、由美とつきあうことを気安く感じさせてくれる。

それに由美も、ランチにはたいい浩子に声をかけてきて、いつもふたりで出かけるのだから、彼女の方も浩子に対して、悪い感情を持ってはいないのだろう。

由美はなんとなく、中学、高校で一緒だった浦河さんに似ている。浩子も、昔ほどには、こつこつしたタイプのひとを苦手に思うことはなくなっていた。

一緒に行くという染谷桜子は同期で、おとなしい子なので苦手ではないけど、吉野智子は元気がよく、ずけずけとものを言うたちで、

みんな、ひとり？

一年後輩なのに浩子にとっては気後れしてしまう相手だ。自分は、あんなに明るくはなかったけれど、どこことなく昔の自分を見ているような気がしてしまうのだ。いや、もしかしたら、昔の自分じゃなくて、まるで似ているところなんて全然ないのに、なぜか今日子たちを思い出してしまうのかも知れない。

でも由美がいてくれるから安心だろう。いろいろ考えすぎて、また知られなくてもいい気持ちまで顔に出してしまわないよう、よけいなことは、もう考えないようにしよう。

「じゃあ、由美に予約お願いしてもいいかな。お店の場所よくわからないから、一緒に行こうね。出るとき、声かけてね」

ベトナム料理店には行列ができていた。三人は、昼休みのうちに予約を入れておいた由美の手際を誉めた。行列を追い抜いて入店できたことが、ほんのすこし誇らしくて気分がよかった。

運ばれてくる料理はどれもめずらしいものばかりで、食事中は、もっぱらその料理とベトナムという国についての話題に終始していた。ベトナム産だというワインも飲みやすく、エスニックな料理にもよく合う。伊達にフランスに統治されていた歴史があるわけではないなどと軽口を叩きながら、ボトルはあつという間に空になった。すかさず、二本めには白がいいと吉野智子が言う。

そろそろ、デザートを注文しようかという頃には、みんなすっかり酔いが回っていて、話題は職場の不満や噂話へと移っていく。

「だけど、田中さんって、ちょっとカッコいいですよ」

そんなとき、ワインを飲んで、ふだん以上に直截になった吉野智子の唐突な発言に、絡まれるのかと浩子は構えた。

「どうして？ わたしなんかどじばっかりで、いいことなんかなんにもないじゃない」

最近、浩子は、本気でそう思っているのだ。

「そんなことないです。田中さん、わたしいつも見てますから！」

みんな、ひとり？

「カッコいいかどうかはともかく、浩子ってマイペースっていうか、あんまり周りに頓着しないところあるよね。そういうところは、わたしもあやかりたいかも」

「すでにずいぶん酔ってしまったらしい吉野智子を見かねてか、由美が話しを継いだ。」

「わたしが周りに頓着しないって？ それをいうなら、吉野智子のほうがよほどマイペースじゃないか。わたしなんか、いつも人の顔色ばかりうかがってるのに。まあ、結果としては、真意を汲み取ることにはできないんだけど、もしかして、そのことへの厭味なのか。」

「でも、ふだんそんなことは言い出さない由美の言葉だけに、あるいは、これもまた社交辞令なのかしらと浩子は悩み、どう答えていいのか迷ってしまった。」

「いったい、わたしのことをどう思われているのだろうと考え出すと、とたんに、暗澹とした、なんとも暗く孤独な気持ちで、浩子の心を覆い始める。」

「ああ、まただ。いつも突然に、自分がどこにいるのか分からなくなってしまうような、この感じ。まるで、ずっと昔の、わけもなく泣きながら、ひとりで帰ったときみたいな気分だ。」

「ほんの少し指先を動かすだけで、取り返しのつかないことをしてかしてしまいそうな気がして、浩子はもう身動きひとつできなくなる。黙りこみ、だれかがなにか話しだすまでじっと待つ。」

「ほら、この前、吉田係長が伝票の整理をいつつけようとして、浩子が思い切り不機嫌そうな顔したもんだから、結局、自分でやってたことあったじゃない」

「そうそう、吉田のやつ、あたしたちのこと雑用係ぐらいにしか思っていないんだから。自分の経費伝票まで言いつけるのなんて腹立つよね。あたしも前に手伝わされて、説明がめんどろだからって、費目とか適当にやっつけて言うくせに、後になってあーだこーだ、直させるんだもん。それなら最初っから言えって感じだよな」

みんな、ひとり？

由美に続いて、いつもはおとなしい桜子までが、吉田係長への不満を口にしました。浩子は、桜子もそんなことを考えていたのかと驚き、やっぱりわたしは人のことがまるでわかってないや、とあらためて思う。

それにしても、あのおときも顔に出てしまっていたのか。

まあ、多分そうだろうとは思ったけど、やっぱり。しかも、事務所にいたみんなにもすっかりと見られていたというわけだ。きつといまこの瞬間も、わたしは「しまった」って顔をしているんだろうな。気をつけないと、慎重に。うかつなことを考えていると、きつと、とんでもないかんちがいを招いて、周りも自分も傷つくことになるのだ。

浩子は、視界がどんどん小さくなっていくような、目の前のものがなんだか、遠ざかっていくような気分になる。身の回りの出来事が、まるでテレビの画面に映った風景のように思えてくる。とたんに、それまでの楽しげで、親しみを感じていた雰囲気も、まるで、みんなすりガラスの向こうに行ってしまったかのようだ。

浩子は、自分の気持ちの変化を気づかれないよう、少し飲みすぎで酔ったみたいだと言って、コーヒーを注文した。

自宅近くの駅からの帰り道でも、浩子はまだ後悔していた。

わたしはいつも、自分の思っていることや考えを、どうしてうまく伝えられないのだろう。知られたくないような気持ちの変化はすぐにばれてしまうのに。

今日も食事をしている間は楽しめていた。それが吉野智子ばかりでなく、由美や桜子までが、考えていることと話していることが本当はちがうんじゃないかと疑い始めたとたんに、寛げなくなってしまう。

どうして自分はいつも、こうなんだろう。こんなことになるなら、やっぱり食事になんか行かなければよかった。いや、今夜は、みんなも酔っていたし、そんなに気にして深刻になるほどではないのか。

みんな、ひとり？

「ああ、やだやだ。なんだかいつもの堂々巡りの自己嫌悪ばかり
夜道を歩きながら、思わずひとり言が漏れる。

無視されるのが怖くて、他人の心にもないような言葉にもすがっ
てしまうのが、わたしだ。それでいて、すぐに、それが本心からの
言葉ではなく、うわべだけなのだと思っている。いや、たぶん、嘘
だと思いつつながら、本心だと信じようとしているのだ。

不毛だ。わたしはなんて不毛なことばかりを繰り返しているんだ
ろう。

浩子は人通りの少ない道を選んでは、ときどき、言葉にならない
ようなうめき声を上げながら歩いていた。自分でも間抜けだなと思
いながら。

そんな風に、回り道をしながらも、角を曲がって駅からの抜け道
になっているいつもの帰り道の路地に入ると、背後から、自転車の
ベルが鳴った。

もしかしてひとり言を聞かれたのではないかと、ひやりとする。
道の右へ寄ると、自転車に乗った小学生が追い越していく。

なんだいつも、この路地ですれちがう男の子だ。今日は塾から
の帰りなのか。こんな遅くなのに、小学生も楽じゃないもんだ。

浩子がそんなことを考えかけていると、突然、やけくそみたいに
元気よく挨拶する声が聞こえてきた。

「こんばんは！」

これまでいちども挨拶なんか交わしたことはなかったのに、その
小学生は、追い越しざまに浩子に初めて声をかけてきたのだ。

「こんばん、は」

浩子はとまどいながらも、一応、返事を返す。すこし考えてから、
浩子は遠ざかっていく彼の背中に向かってもう一度声をかけた。

「遅くまで、たいへんね」

小学生はびっくりしたように、ブレーキをかけて振り返って、一

みんな、ひとり？

瞬ためらってから思い切りわざとらしく愛想笑いをつくると、すぐに前を向いて自転車をこいで去って行った。

そのつくり笑顔がおかしくて、浩子も思わず笑ってしまった。きつと、とっさになんて答えていいのかわからなくなって、とりあえず笑顔で返そうとしたのだろう。

顔見知りといえば、顔見知りではあるけど、ただ道でよくすれ違っただけの相手に挨拶をするのには、きつと勇気がいったにちがいない。夜道だからと、子供なりにも気をつかったのだろうか。あるいは、わたしがベルを鳴らされて、気分を害するとも思ったのかもしれない。

でも、挨拶だけじゃなくて、ひとこと声をかけてみてよかった、と浩子は思った。無理やりの引きつった笑顔も、そう悪いもんじゃなかったな、と。

浩子は、さつきまでのもやもやとした気持ちだが、たったそれだけのことで、ずいぶん軽くなっていた。

よしっ。帰ったら、すぐに熱いお風呂に入ろう。今日は、それでなんとかチャラにできそうだ。

吉田係長の災難

ほんの少し姿勢を変えただけなのに、腕を上げることもできない。

それでも、数年前よりはましになったとはいっただけれど、朝の急行電車は相変わらずの混雑だ。さっきから吉田徹也は、腰のあたりにだれかの鞆が当たっていて、車両が揺れるたびに押されるので痛くてたまらない。わざとでないと分かってはいても、自分がどれだけ他人に迷惑をかけているのか気づこうともしない鈍感さには腹が立ってくる。おまけに、体をひねってかわしたくても、身動きひとつとれないのだ。

それでも、あと十分ほどの辛抱だ。さっきの駅を出たら、もう終点までは停まらない。

窓の外に目をやれば、気持ちよく晴れ渡って日の光がまぶしい。高架線路の上からの眺めは、空が広く遠くの景色まで見渡すことができる。すがすがしい三月の朝の風景だ。十両編成の車両の中には、紺や灰色の背広を着て黙りこんだ男たちが、ぎっしりと隙間なく詰め込まれているというのに。

吉田の目の前には、いまだきめずらしい、きっちりポマードで整髪した後頭部がある。その甘い匂いにも閉口するが、揺れた拍子に鼻の頭にポマードが付いてしまいそうで、吉田はついっいのけぞるような姿勢になる。そうすると、今度は後ろから、鞆が背中に食い込んでくる、という寸法だ。

車内の空気は濼んで、じっとり汗ばんでいる。クーラーとまで贅沢は言わない、送風ぐらいしてくれればいいのに。吉田は、せめて外の空気でも入れてもらえないかと思っただが、だれひとり、窓を開けようとするものはいなかった。

みんなが首筋や鼻の頭に汗を浮かべて、ネクタイだって緩めていくくせに、どうしてだれも自分から、この事態をなんとかしよう

みんな、ひとり？

みんな、ひとり？

しないのだろう。自分が窓際に立っていたら、すぐにも窓を開けるのに。だれもかれも、自分が目立つことが嫌だというだけの理由で、この不快な状況を我慢しているのだ。

こいつらはみんな、仕事でもきつとそうなんだろうな。けっしてでしゃばらないようにして、目立たずに、言われたことだけをやっているにちがいないんだ。会社の部下の腰掛けOLたちとまるでいっしょだ。言われなければなんにもしない。それでいて、細かく指示をすれば文句を言う。ほんとうにまったく救いようがない。

吉田は、部下のOLたちが費目の分類が難しい伝票のチェック方法を理解できるようにと、自分の経費伝票の分類作業をさせてみたときのことを思い出し、よけいに腹が立ってきた。

現場から回ってくる伝票の申請書類の処理でミスが目立つので、実際に自分で費目分類をやらせてみて、チェックするポイントを分からせようとしたのだけど、そんな思惑も空回りするばかりで、部下の彼女たちにはまるで理解されることはなかった。ただ、吉田が楽をしたために仕事を押し付けているとしか思われていないのだ。結局、言いつけられた仕事をめんどくさそうに処理して、まちがいを指摘しても、なんでまちがえたのかと考えることもしなかった。

ひとつとおり順番に、全員に頼んでみたのだけれど、だれひとり、そこから学ぼうなんて姿勢はみじんも見られなかった。もちろん、こちらの意図を説明した上でやらせてみてもよかったのだけど、そうした日常の業務のなかからでも、なにかを身に着けようという姿勢も養ってほしかったのだ。

そんな上司の思いを知りもしないで、きつと、ランチのときには、おれの悪口で盛り上がったたりしているんだろうな。もっとも、それも中間管理職の仕事のうちなのだろう。それでもまだ、部下に手を出してるかのように言われて、セクハラだとか、不倫だとか騒がれるよりはよっぽどましだと、あきらめるしかない。

そんなことを考えているうち、部下への不満もあいまって、吉田

みんな、ひとり？

はだんだんと自分以外の満員電車の乗客全員に対して腹が立ってきた。鞆を押し付けられている背中痛みも、もうこれ以上は耐えがたいほどだ。おまけに、このポマード頭から立ち上ってくるアブラっぽく甘ったるい臭いにも、胸が悪くなりそうだ。

まずは、振り向いて文句のひとつも言ってみようか、そのときついでに、このポマード頭には、おかえしの嫌がらせで背中に肘をぐりぐりと押し付けてみるか、などと考えているうちに、吉田はほんとうに、いまにも不満が爆発しそうなほど、怒りがこみ上げてきた。

「おい、ちょっといいかげんにしろ！」

同じ車両の向こうの方で、揉め事が起こった。けっして大声ではないが、怒気をはらんで尖った声だ。たちまち、車両中の耳がその声のする方向へと向けられた。

「なんですか、混んでるんだから、我慢しましょうよ」

「さつきからふらふらして、ちゃんと立てよ」

「そんなこと言ったって。混んでるんだからさ」

吉田は、怒声をあげているのが、まるで自分のような気がしてきた。しかしどうも、迷惑そうに言い訳をしているほうが、言っていることは正しいように聞こえる。

「まあまあ、ほら、みんな狭いんだから、お互いさまだからやめてください」と仲裁に入る声も聞こえてきた。

「お前も、迷惑だから静かにしろよ」と、どこか遠くのほうからは、さらに不機嫌そうな声で横からよけいなことを言うものもいた。

最初に文句を言ったあいつ、いまごろ、気まずい思いをして恥ずかしいだろうな。その上、これから、まだ終点までは、身動きひとつできないで、そのまんま隣合ってなきゃいけないっていうのに、バカだなあ。

もしかしたら、もうすこしで自分もあんなっていたのかもしいのだ。短気を起こさないでよかった、と思うと、吉田の苛立ちもすこしずつ紛れていった。争いは、どうやらたいしたこともなく収

みんな、ひとり？

まりそうだ。もっとも、どうせろくに身動きもできないのだ。言い争い以上に発展するのは難しい、というよりもどだい無理な話なのだ。

終点まで、駅にしてあと、たったの二区間分だ。もう五分かそこらで、この苦しみからも解放されるはずだ。ポマード頭越しに、朝日の当たる家々の屋根を眺めながら、吉田はもう何も考えないように、終点の駅に着くまで、じっと耐えることにした。

そう思った矢先、列車はブレーキをかけ、みるみる速度を落とすていく。ラッシュ時の過密ダイヤで、前方の線路に列車が詰まってもいるのだろうか。吊革をつかむこともできないでいた大多数の乗客たちは、ゆるい塊となって車内を流れだす。吉田も押されるままに、転ばないよう、みんなと一緒にになって小さな歩幅で横へと移動した。

すると、それまで一杯だったと思っていた車内も、どこかにあった隙間が埋められでもしたのか、吉田の周りにほんのすこしだけ空間が生まれた。しかも、運よくポマード頭や背後の鞆からも逃れることができた。

なんだ、そうそう悪いことばかりでもないじゃないか。よけいなことなんかしないでも、じっと待っていれば、いいことだってあるもんだ。

吉田は、つい先ほどとは、まるで逆のことを考えていたが、自分ではそのことに気づいていない。

列車はさらに速度を落としていく。そして完全に停車してしまうと、車内のどこかでだれかがためいきをつき、何人かが舌打ちをした。

この毎朝の苦行から、もうすこしで開放されると期待していたのに、こんなところで停滞してしまったことに落胆したのだ。おあずけを食った犬が、そのうえ目の前でえさを取り上げられてしまったみたいなものだ。それはきつと、いまこの列車に詰め込まれている

みんな、ひとり？

数千人の背広姿の男たちに、確実に共通する思いにちがいはなかった。この車両に詰め込まれている全員の落胆が、みるみる膨らんでいって、圧力を高めて、いちばん薄くなっていたところから破け出して、だれかの口からこぼれていく。満員電車のサラリーマンたちのぎゅうぎゅうに押し固められて、澀んで湿った不満が、ひとつの方向に向かってあふれ出たのだ。

すると、それを合図にしたかのように、車両の先頭の方でだれかが窓を開けた。さらに、つぎつぎと車両のあちこちで窓が開けられていく。外の涼しい風が車内を吹き抜ける。

三月の朝の新鮮な空気が、あつというまに、澀んで不満だらけのためいきや汗の臭いと入れ替わっていった。

列車は時刻表より三分遅れで終点の駅についた。扉が開くと、改札までの間に遅れた到着時間を取り戻そうとするかのように、サラリーマンたちは押し合いへし合いしながら一斉に駅のホームへと流れ出していく。

吉田も、まるでだれかと競争でもしているみたいに、すこしでも早く乗り換えの地下鉄のホームに着こうと、改札口へ向かって急ぎ足になる。前方にちよつとでも歩くのが遅いのがいれば、その横に出て、すばやく追い抜いていく。混雑のなかで左右に進路を変えていくと、鞆や肩があたるが、そんなことにかまってはいられない。一、二本あとの電車になっても遅刻をするわけではないけれど、いつもどおりの、同じ電車に乗るのだ。そう決めたのだ。

そんなとき、だれかが後ろから吉田の肩を叩いた。吉田は、この急いでいるときに、いったいだれだと不愉快になった。もしかして肩がぶつかっただれかが、文句でも言うつもりなんじゃないかと警戒した。そんなことに巻き込まれたら、確実に乗り遅れてしまう。

「もしもし、落としましたよ。これ、あなたなのでしょう」

振り向くと、ポマードで髪を固めた年配の男が、人の良さそうな笑顔で皮製の小銭入れを差し出していた。ほんの五分前まで目の前

みんな、ひとり？

にあった、あのポマード頭だ、まちがいない。

そのポマード頭が手にしているのは、吉田の小銭入れだった。たぶん、歩きながら定期入れをポケットから出したときに落としたのだ。

「あ、はい。そうです」

まるで予想もなかった事態に、吉田はただ、そう答えるだけだった。

ポマード頭は、定期入れを持った吉田の手の中に小銭入れをねじ込むと、笑顔のまま、すぐに雑踏の中へと紛れていった。吉田は口の中でもごもご言っぱかりで、きちんと礼を述べることもできないでいた。

改札へ向かうひとごみのなかで立ち止まっている吉田の両脇を、大勢のサラリーマンたちが、つぎつぎと邪魔そうに追い越していく。反対側のホームで、下りの急行列車のドアが閉まると、まるで、ターミナル駅のせわしない空気をすこしでも郊外まで運び出してしまおうとするかのように、がらがらそのままの車両がゆっくりと動き出した。その空いたホームには、もう次の上りの準急電車が、背広姿の男たちをぎゅうぎゅうに詰め込んで入ってくる。

「まあ、たまには、のんびりと行くのもいいかな」

吉田は自分に言い訳をするみたいに、わざわざそう声に出してみた。

そして、大きく息を吸ってから、「ミルクスタンドでコーヒー牛乳でも飲んで行こう」と、さらにつづけた。吉田は、ひとごみの流れから抜け出すと、さっき手渡された小銭入れを開いた。

素敵な声

素敵な声が聞こえてくるのだと、ヨーコは言う。

そのことを、どうしても会って話したいと言うから、その日、吉野智子は会社帰りに、まっすぐ待ち合わせをしているヨーコの家の近くのガストへ向かった。約束の時間にすこし遅れて智子が着くと、ヨーコはサラダバーで山盛りにした野菜と格闘している真っ最中だった。

「よ、智ちゃん、すっかりＯＬだね」

智子に気づくと、スーツ姿が珍しいのか、ヨーコはわざとらしく、にやにやとしながら、頭のとっぺんからつま先まで何度も往復するようにして智子の全身を眺めている。

「なに言ってるのよ。そんなこと言って、ひとのことＯＬだと思って、バカにして。お茶汲みでもさせる気なんですよ」

「ううん、全然、そんなことないよ。じゃさ、申し訳ないけど、ドリンクバーおごって。お茶汲んできてあげるからさ」

「いいけど。仕事まだ決まんないの？ まあ、ヨーコはフリーターも似合ってるけどね」

「最近フリーターっていうより、ニートだよ。自慢じゃないけど、国民年金だって、払ってないよ」

「確かに。自慢じゃないね」

ヨーコはもともと、昔からすこし変わっている。服飾の仕事がしたいのだと言って、専門学校を卒業したのに就職もせず、ときどき知り合いだというデザイナーの手伝いで型紙を切ったり、ミシンをかけたりにしているらしい。ただ、定期的にそういった仕事があるわけでもないようで、ほかにもいろいろとアルバイトもしているみたいだ。

そのうえ、ときどき今日みたいに訳のわからないことを言い出す

みんな、ひとり？

みんな、ひとり？

ので、智子は正直、つきあいきれないと思うときもあったけど、それでもやっぱり、こうして連絡があればつい会いに来てしまう。今度は「素敵な声」だと言っているけど、この前の「ものすごくきれいな光」のときには携帯電話のフラッシュライトの設定で、着信ごとに光る色を何通りにも変えられることを発見しただけだったし、「気絶しそうな砂糖菓子」を見つけたとあって、それはどんなものかと聞いてみると、茶色い氷砂糖のようなコーヒージュガーを置いている喫茶店を見つけて、飲み物さえ頼めば、それを、ただでいくらかでもかじることができると力説していた。

要するに、いつもあまり大したことじゃない。しかし、ヨーコはいつも、そんなものばかりを探し出して、幻想的な大発見をしたと言っては、智子のことを呼び出していた。でも、それはたぶん「なんとなく会いたい」というのが照れくさいだけなんだろうということが、このところ、智子にもようやく分かってきた。なので、最近ではヨーコの言う大発見の内容自体は、もうあまり追求しないようになっていた。

もし、ヨーコと会社や学校で出会っていたとしたら、智子は絶対に友だちにはならなかっただろう。むしろ、あまり関わりたくない、避けるようなタイプだ。そんなヨーコと親しくしているのも、それこそ、ヨーコが会社とも学校とも無関係なところで知り合った友人だからかもしれない。

ヨーコは、智子がほかの知り合いには、けっして明かしてこなかった秘密を共有する数少ない、いや、ほぼ唯一の存在だった。

ふたりは三年前、東京ビッグサイトで行なわれていたゲームやアニメのキャラクター商品のイベント会場で偶然に出会った。ふたりは、あるTVゲームの二大ヒロインの衣装を着て、それぞれの役になりきっていた、つまり、コスプレをしていたのがきっかけだ。

それは、ちょうど対になる設定のキャラクターだったのだけど、

ふたりとも、ひとりで参加していたのだ。

たまたま会場で出会ったふたりは、ほかの来場者たちから、その場でカメラ撮影のモデルになってほしいと頼まれた。そんな求めに応じて、一緒に並んでポーズを取ったりしているうちに、いつの間にか意気投合するようになったのだ。その上、じつは同じ歳なのだと分かると、たちまち仲よくなってしまった。

智子はゲームやアニメ好きが昂じてコスプレまでしていることを、会社のひとにはもちろん、高校、短大のころからの友人にも秘密にしている。別にオタクが悪いとか、自分の趣味が恥ずかしいと思っ
ているわけではないけれど、自分の周囲の人たちは、きつと理解してくれそうにもなかったから。しかも、まちがった知識で興味本位な対応をされるはめに陥るか、あるいはイチから説明しなければならなくなるのかと考えると、もうそれだけで、あえて打ち明けてみようという気にはならなくなってしまっていた。

ふだんの生活の中では、あたりさわりのない一般的な趣味の範囲で、ドラマや映画や、流行のバンドを話題にしていれば十分だ。

それに、コスプレだって、就職してからは、もう半年以上もご無沙汰している。学生のころより、お金は自由になるようになったけど、なにしろ時間がなくなった。最近では、出来合いのコスチュームも売られているので、そういったものを利用すれば、土日のイベントに参加することはできるけど、智子は、やっぱり自作しなければ意味がないと考えていた。

会場でキャラクターを演じることも楽しいし、そうして注目されるのもうれしいけれど、智子もじつは、準備をして、衣装を作るこの方が好きだった。完成するのは、いつもたいていきりぎりだったけど、それをたたんでバッグに詰め込んで、出かける準備をしているときまでで、智子の楽しみの七割ぐらいは終わったようなものだ。会場でキャラを演じるのは、もちろん最大の盛り上がりではあるけど、それは言わば、締めくくりだ。

みんな、ひとり？

みんな、ひとり？

初めてヨークと会ったとき、彼女のコスチュームは完璧だった。ほんとうにゲームの中からそのまま抜け出してきてしまったように、正面だけでなく、横から見ても後ろから見ても寸分のイメージの狂いもなく、どんなポーズを取っても自然だった。それは、まだ発表されたばかりの注目のゲームのキャラクターで、数週間前、ゲーム雑誌に基本的な設定画が掲載されたばかりの最新作だ。まだ、これから仕様を変更するかもしれないような発売前のゲームの設定の衣装なんて、どこにも売っていないことは知っていたし、それを、彼女がいつたいたいどうやって手に入れたのか、智子はほんとうに不思議に思ったものだ。

その時、初めて自作した智子も同じゲームに出てくるキャラクターを選んでいただけれど、それはいかにも手作りといった、既製のブラウスやスカートにリボンテープやレースで飾っただけの衣装で、出来から言えば雲泥の差だった。智子は、そのキャラクター画を見たときに、手軽にできそうだと思ってたまたま選んだだけだ。しかも、さすがに超最新作のキャラクターだっただけに、会場ではそのゲームのコスプレをしているひとは、ほかにはいなかった。おまけに、ヨークの衣装の出来がよかった分、隣に並んだ智子の衣装も、実際よりも数段、見栄えよく映っていたようだ。

当時はお互いに高校生だったけれど、そのころから、ヨークは服をつくるのが大好きで得意だった。

そんなヨークは、いまも夢を追いかけて、就職もせず年金すら払わずに、好きな服作りをつづけている。一方で、智子は、とくに何がやりたいということもなく、ふつうに会社勤めをして、毎日、満員電車で揺られるようになっていた。かつては同じ場所で、いつでもすぐ隣に立っていたはずのふたりなのに、ずいぶんと、ちがう景色を見るようになってしまったみたいだ。

それでも、こうして会っていると、智子も、一緒になって夜通し衣装作りをしていたころみたいな気持ちになってくる。それは、もしかするとヨークにとっても同じなのかもしれない。

みんな、ひとり？

「最近は、智ちゃんともあんまり会えないしさ。イベントも行けなくてつまらないよね」

智子が席につくと、ヨーコはいつも、妙にしみじみと話し出すのだ。

「そうだねえ。でも、新入社員はこき使われるんだよ。残業は大したことないけど、やっぱり学生のころみたいに徹夜とかもできないしさ。でも、ヨーコは時間あるんだからさ、遠慮しないで参加すればいいじゃない」

「まあね。遠慮してるわけじゃないけどさ。やっぱり智ちゃんと一緒にじゃないと、コスも、なんか気合入んなくてさ。まっ、それはこっちの都合だけだね」

そう言われると、智子はなんとなくむずがゆく、うれしいようなうっとおしいような気分になる。別にそういう趣味はないのだけれど、もしもヨーコが男だったら、もしかすると付き合っていたのかもしれないなど、智子は以前から思っていた。

「でも、ヨーコは自分のやりたいことがあって、それを実現しようとしてがんばってるんだから羨ましいよ。わたしなんて……」

わたしなんて、なんなんだろう。会社で一日中パソコンでデータを入力して、伝票のはんこを確認して、お茶当番のお菓子を買いに行つて、お昼にはできるだけいるんなグループの人と一緒に、仲間に入れてもらおうとして。

わたしなんて、と言つた、次の言葉が出てこない。わたしがヨーコに話したいのはそんなことなんかじゃない。

「わたしなんて、根っからのコスプレイヤーですー、腐女子ですーつて、会社でもカミングアウトしちゃいなよ」

ヨーコは、ふざけて冷やかすように言う。その声が大きくて、周りの席の客まで、こちらをちらちらと見るので智子は恥ずかしくてたまらなかつた。

たしかに腐れ女子とはいったいどんなものなのか、一見の価値ぐらいはありそうだ。

みんな、ひとり？

もしかすると、いかにもOL然としたこのスーツ姿だって、アドルトゲームのコスプレぐらいには見えるかもしれない。でも残念なことに、そういうキャラはたいがい巨乳ってことになってるので、そもそも智子には無理があったけど。

それにしても、こんなところで、大声でそんなこと言うな！

「ちよつと、やめてよ。冗談。そんなの無理無理、ぜつたい」

ああ、でもやっぱりヨークといると、気が楽。無理に元気でハツラツとした女の子を演じることもない。たしかに元気は余ってるほうではあるけど、わたしだってそんなに、いつも爽やかなばかりじゃないのだ。けっこうウジウジしたり、意地悪だったりもする。

なにより、ヨークとは好きなアニメやゲームの話だって、気にせずができる。

智子がヨークと一緒にいたいと思うのは、無理に自分を演じたりしなくてもいいからだ。ヨークには本当の自分を見せられるし、智子のことだってちゃんと分かってくれている。

「それでね、この前発見しちゃったんだ。これ聞いたら、智ちゃんも感動もんだよ」

「えー、マジすか？ それが素敵な声ってやつ？」

「そうそう、もう、チヨウ素敵。もうじき来るよ、多分。ほら、来た！ これこれ！」

小声ながら、ヨークの言葉に力がこもる。ヨークはなぜか、テーブルに伏せるようにしながら、人差し指を立てて天井を指差している。

店内のBGMが、騒々しい音楽に変わると、「ガスト秋の限定HOTメニューキャンペーン」を告げるコマースャルのアナウンスが流れ始めた。とくに個性も感じられない、甘ったれたしゃべり方をする女の声が、シチューとハンバーグのプレートがオススメだと、早口でまくしたてるみたいに話していた。

「ん、これが素敵な声？ なんか、普通じゃない？」

「えっ、そっか、やっぱり自分じゃわかんないんだ。この声、智ち

んにそっくりだよ。ってゆうか、最初、智ちゃんがついに声優デビューしちゃった、って思ったんだから。で、チエーンの本店の宣伝担当とかの人にまで電話して、この声の人調べてさ。名前はちがったんだけど、もしかしたら芸名かもって。事務所探してプロフィール確かめたりしたんだよ。もしそうならお祝いしなきゃって」

「えー！ わたし、こんな声してるかなあ？」

智子は、初めて自分の声を聞いた日のことを思い出す。

中学のころ、携帯の留守伝メッセージを自分で入れて聞きなおすと、携帯電話の録音機能はなんて音が悪いんだろうと思った。

まるで他人みたいな、いやな声。

だけど、翌日、学校でそのことを友人に話して、聞かせてみるとそれは智子の声そのものだという。だれでも、自分の声は思っているのちがうものなのだとわれ、友人の声と一緒に自分の声を録音してみると、ひとりだけ知らない声が混ざっている。それが智子の声だった。ほかの友人たちの声は、ふだんの聞きなれたそのもので、携帯電話の録音機能のせいではないことを、無理やり納得させられたのだ。

智子は自分の声が気に入らなかった。いままでずっと、こんな声で、友だちに冗談を言ったり、悩み事を相談していたのかと思うだけで、ぞっとする。わたしは、こんないやらしい声で話したりなんかしていない。こんな声はわたしじゃない。わたしのはずがない。

「そっかな、でもなんかやだな。わたし自分の声ってあんまり好きじゃないんだ」

智子は、自分の声についての話題は、その嫌いな声で話さなければならぬことさえ、あえて意識させられてしまうようで、いやだった。

みんな、ひとり？

みんな、ひとり？

「なんで？ かわいい声してるのに。ほんと智ちんの声って素敵だよ。わたしは好きだよ。なんか、安心するっていうか。和む声だと思っけどなあ」

これだけ誉めても、智子の反応がいまひとつなので、どうやらヨロコはつまらなそうだ。何度も繰り返し返されるアナウンスを聞きながら、しまいに智子は黙り込んでしまったので、ヨロコもついには、もうそれ以上この話題をつづけることをあきらめた。

「じゃ、ドリンクバーでも行くか、智ちゃんはコーラでいいんだっけ。持ってくるよ」

「うん」

智子はできるだけ言葉数が少なく、ほとんど声をださなくてもすむように、返事をした。

それにしても、わたしって、やっぱりあんな声してるのかなあ。

「あゝあ、なんか、やんなっちゃうな」

ひとり席に残されてから、智子はわざと声に出してみた。

いまのこの声だって、自分で思っているのは、ホントじゃないのかな。ホントの声は、自分で考えているのと違っていているんだ。だけどホントの声って、いったいどっちなんだろう。

智子は声だけでなく、もしかしたら、ふだんの行動だって、自分が思っているのと、まわりからの評価は、まるでちがっているんじゃないかという気までしてきた。

わたしが思っているほど、わたしはうまくやっってるわけじゃないのかもしれぬ。いやらしい部分や、意地の悪い面を隠せていると思ってるのは、自分だけなんじゃないだろうか。そう考え出すと、途端に自信がなくなってきた、ホントの自分っていったいなんだろうという思いさえよぎる。

ホントって、いったいなんだろう。

みんなが聞いているわたしの声はホントのわたしの声じゃないけど、まわりの人にはホントの声。コスプレをするのはホントのわた

みんな、ひとり？

しじゃないゲームのキャラクターになりきるのが楽しいんだけど、
それをしている時間は、わたしにとってはホントのことだ。
ホントのわたし。ホントにやりたいこと。ホントに分かってくれ
る友だち。ホントの……。

「うん、わたしってばいたい、なに考えてんだか」

ヨーコが、ドリンクバーでコーラを入れたグラスに、レモンスライ
スを入れるしぐさをしてこちらに合図している。智子は大きくう
なずくと、指でOKの形を作った。

なみなみとコーラを注いだグラスを両手に持って、こちらに歩い
てくるヨーコの姿は、なんだかすこし滲んで見えた。

眠るための方法

その年配の女性は、まっすぐに背筋を伸ばし、じつに美しい姿勢でナイフとフォークを使う。

諸田信二は、思わず見とれていた。

皿に残ったソースをパンでぬぐい、口へと運ぶ所作さえ優雅に映る。品格というものは、こうした日常の、ほんとうになんでもないような仕草にこそ現れるものなのだと感心する。

まさに「老婦人」とでも呼ぶのがぴったりのその女性は、深夜営業のレストランで閉店間際のラストオーダーも過ぎた時刻にたったひとりで食事をしていることだけが、ふさわしくないように思える。店内には、ほかにもう一組、若い男女の客がいるだけだ。

都心から三十分ほどの私鉄の駅の商店街のはずれにある、テーブルも五卓しかない小さな洋食店だ。オーナーシェフと言えば聞こえはいいが、週末を除けば、この時間にはフロアーを担当している妻は帰ってしまったて、給仕から会計まで、諸田がひとりでこなさなければならぬ。

「失礼いたします。デザートをお持ちしてもよろしいですか」

食事を終え、ひと息ついたタイミングを見計らって、老婦人に声をかける。

「ええ、お願いします。お料理、とてもおいしかった。いいお店ね、すっかり気に入ったわ」

「ありがとうございます。お口に合っただけによります。お飲み物はコーヒーと紅茶がございますが、どちらにいたしましょう」

「コーヒーもあなたが淹れてくださるのかしら？」

「はい。エスプレッソは機械ですけれど、ブレンドコーヒーならば、わたしがドリッパいたします」

「じゃあ、ブレンドコーヒーをいただきわ。あれだけおいしいお料

みんな、ひとり？

みんな、ひとり？

理を作るのだもの、きつとコーヒーもおいしいんじゃないかしら
「ええ、おいしいんですよ、うちのコーヒー。とつても」

諸田は思わず、笑顔になった。

彼女のテーブルのあいた皿を片付け、キッチンに戻る途中、諸田は、若いカップルの客からも呼び止められた。

「すみません、こつちもコーヒーをもらおうかな。ブレンドを、ふたつ追加で」

ふたりはビーフカツとスパニッシュオムレツを注文して、それをつまみ代わりにしてビールを飲んでいたのだが、いまの諸田たちの話を聞いて、自分たちも最後にコーヒーを飲みたくなったのだろう。
「はい、かしこまりました」

もうラストオーダーは過ぎていたが、諸田はふりかえると、愛想よく返事をした。

ちようどそのとき、若い女の携帯電話が鳴った。女は慌てて着信を確かめると、小声で電話を受けながら、店の外へと出ていった。どうやら、公共の場所でのマナーぐらいは、きちんとわきまえているようだ。

正直なところ、諸田はたつたいままで、この若い客を老婦人と比べてしまい、あまりよくない印象を抱いていた。それが、こんなほんのちよつとしたことをきっかけにして、なんだか、急に好ましく思えるようになっていた。

たかがコーヒーの追加注文ぐらいで客を見る目がちがってくるのは、われながら現金なものだと、諸田は内心、苦笑する。

コーヒードリッパーにペーパーフィルターをセットして、三杯分のコーヒー豆を挽いた粉を入れる。ていねいに、まわすようにして湯を注ぐと、コーヒーの粉が泡とともに盛り上がっていき、店内にコーヒーの甘い香りが充満した。

コースメニューのデザートと、三人分のコーヒーをトレイに載せると、諸田は客席へと向かった。しかし、店内には老婦人しかいな

かった。

あの若い男は、トイレにでも行っているのだろうか。諸田は老婦人のテーブルと、主のいないカップルのテーブルに、コーヒークップを並べた。ついでに、テーブルの上の皿を片付けていると、老婦人が諸田に声をかけてきた。

「その席、お連れの女性がなかなか戻ってこないみたいで、男の方も、様子を見に出て行っちゃったわよ」

「なんだか嫌な展開だな。」

携帯電話が普及したおかげで、飲食店での食い逃げは、格段にやりやすくなったことだろう。携帯なんてなかった時代なら、食事の途中で店から出なければならぬ理由なんて、めったにありはしなかったのだから。勘定もせず店を出ようとすれば、必ず呼び止められたはずだ。しかし、いまや、携帯が鳴れば話しをするために店の外に出ていくなんてことは、だれでも平気です。むしろ、こんな小さな店ならば、かえってマナーがいい客だと思われるほどだ。実際、諸田だってたったいまそう思ったばかりだ。

諸田は扉をすこしだけ開けて店の外をのぞいてみた。通りに人影はなかった。この時間には、めったに車も通らない。少し離れた交差点では信号が赤色の点滅を続けている。

遠くのほうから、短く鳴らされた列車の警笛の余韻と、単調に響く踏み切りの音が風に乗ってかすかに聴こえてきた。

扉を閉めて店内に戻ると、これはやられたかな、と諸田は観念していた。

「ああ、おいしい。もったいないわね、こんなにおいしいコーヒーを飲まないなんて」

老婦人はデザートのスプーンを食べ終わると、ほんとうにおいしそうに、コーヒーを飲み干した。

「お気に召していただけですね。あの、失礼かもしれませんが、よろしかったら、もう一杯召し上がっていただけませんか。」

みんな、ひとり？

みんな、ひとり？

こちらのコーヒー、このままでは冷めてしまいますので、もしもおいやでなければ、ですが。もちろん、お代はいただきますし、こちらのお客さまの分は、戻られたら新しく淹れ直しますから」
「あら、そう。捨ててしまうのも、もったいないわね。じゃあ、せっかくだから、ただこっかしら」

諸田は、一杯を老婦人のテーブルに運び直し、もう一杯は自分で飲むことにした。

コーヒーはもうそれほど熱くはなかったが、まだ風味は十分に味わえる。かえって飲みやすいくらいの温度だ。

「えらいものだわ」

キッチンの入り口に立ったまま、店の扉をぼんやり眺めながらコーヒーを飲んでいる諸田に、老婦人が話し掛けてきた。

「え？」

諸田は何を言われたのか分からず、思わず聞き返していた。

「そんなふうに、戻ってくることを黙って待っていていられるなんて、えらいと思うわ」

「いやいや、そんな、たいしたことじゃありませんよ。待つしかないですから。もしも逃げるつもりなら、もう、とつくに遠くまで行つてるでしょうし、それに、本当にただ電話をするために行つただけで、ちようど警官でも呼んだところに戻ってきたりしたら、それこそバツが悪いじゃないですか」

ただ、それにしても、なにも姿が見えなくなるほど遠くまで行くこともないのに、と思っただけだ。諸田は信じるというよりも、願っていた。どうか、きちんと勘定を払いに戻ってきてくださいと。まったく。そのとおりね」

老婦人は、両手でコーヒーカップを包むようにして持つと、遠くを眺めるように店の扉へ視線を向けた。まるで、扉の向こうにつづいている人通りの絶えた深夜の通りを見つめているみたいに。

「それにしても、困ったわね」

みんな、ひとり？

「ええ、困りました」

閉店時間の深夜零時まで、あと十五分ほど。

「なんだか、このままでは気になってしまって、家に帰っても、すぐには寝つけそうにもないわ。ねえ、わたしも、あのおふたりが戻ってくるのを待ってみてもいいかしら」

「あ、ええ、もちろんかまいませんよ。でも、閉店時間までお待ちになって、それでも戻らなければ、残念ですが」

諸田は、わざわざ警察を呼ぶつもりはなかった。今晚は店を閉めて、明日、仕込みの前にも近所の交番に寄ってくれば、それで十分だろう。たかが食い逃げぐらいで、すぐに捜査網が敷かれるわけでもないのだ。

どうせ捕まるわけがないとは思ったけれど、それでも、通報だけはしておいた方がいいだろう。

「そうね。じゃあ、せつかくだから、賭けてみませんか？」

「え、賭けるって、どっちにですか」

老婦人の表情は、さっきまでより、とても若々しく見えた。まるで、いたずらをしかけて、からかってでもいるような目で諸田のことをじつと見ていた。

若い頃は、さぞかし魅力的だったにちがいない。そう思うと、諸田はついつい視線が泳いでしまった。老婦人はそんな諸田にはおかまいなく、話しをつづけた。

「あなたは、すこしぐらいは、ふたりがこのまま、戻ってこないかもしれないと、疑っているわね」

「ええ。まあ……、半分ぐらいは」

「じゃあ、一度は疑ったのに、ふたりが戻ってきてあなたの勝ちというのでは、納得いかないわ。ふたりが戻ったら、お勘定は払ってもらえるけど、あなたは負けってということでもいいかしら？」

「ええ、そうですね。それで賭けにも勝ったって言うんじゃ、いいことづくめですものね」

「そうしたら、もしふたりが戻って来たら、あの人たちにも、この

みんな、ひとり？

おいしい淹れたてのコーヒーを、サービスしてあげてちょうだい」

「わかりました、それぐらいで罪滅ぼしになるのなら」

「ふたりが戻って来なかつたら、わたしが負け。あのひとたちの分のお勘定を払わせていただくわ」

老婦人の提案に、諸田は驚いた。

「でも、それじゃあ、あまりにも申し訳ありません。そこまでしていただくわけには」

そうすれば、賭けに勝つても負けても、店に損害が出ることはなくなるが、彼女にそこまでしてもらう理由がない。

「あら、まだ分からないわよ。だってわたしは、戻ってくるほうに賭けたんだもの。それに、何万円分も料理を注文しているってわけじゃないでしょ。こんな年寄りが、ちよっとしたスリルを味わうには、手ごろな金額なんじゃないかしら」

たしかに、彼女の言うとおり、金額にしては大した額ではない。ふたり分合わせても、コースで注文した彼女ひとり分の料金と大差はなかった。

「でも、いいんですか。本当に」

「あら、あなた、やっぱりふたりが戻って来ないと疑っているのね。いいわ。ねえ、その理由を教えてさしあげましょうか」

彼女はまっすぐに、諸田を見ている。

「さつき、あなたがお店の外を見に行ったとき、暗い通りには、だれもいなかった」

「ええ、そうです。見渡すかぎり、猫の子一匹」

「そのせいだわ」

自信に満ちた表情で断言する。だけど、諸田には、それがどう関係があるのか、よくわからなかった。

ただ、年齢を重ねた女性から、強い意志をもってなにかを言い切られたりすると、たいていの男はそれだけでなんとなく抗えないものを感じてしまうものだ。近頃、話題になっていいる女性占い師が、どう聞いたところで、ただ単に、無責任で感情的なことを言い散ら

みんな、ひとり？

かしているだけなのに、テレビでは「ズバつとものを言う」などともてはやされてしまうのも、きつとそのせいなのだろう。

諸田も、老婦人がこれからさらに言い切るであろう言葉を、耳にする前から、もう受け入れるつもりになっていた。

「そんな秋の夜の空気が、あなたの心のなかに入り込んだせいよ……なんていうと、ちょっとおかしいと思うかしら。でも、あんまり寂しい風景を見てしまったものだから、それが、あなたの考えにも影響したんだわ。なんだか、ひとりぼっちで置き去りにされてしまったような、心細い気分になったんじゃないかしら。その印象が、あのふたりに重なってしまっているのよ、きつと」

なるほど、そういうこともあるかもしれない。

「それでは、あなたはどうして、ふたりが戻ってくるとお考えなんですか」

老婦人は意外そうに、なにをいまさらという顔をしたが、小さくうなずくと、さんざん繰り返した説明を、もういちど始めからするみたいに話し出した。

「あら、だって、あのおふたり、とっても楽しそうにお食事をしていたんだもの。それにとってもおいしそうに召し上がっていたわ。お金が無くて逃げるつもりだったら、あんなに幸せそうにお食事はできないんじゃないかしら」

そういえば、ふたりのテーブルの皿は、きれいに空になっていた。諸田は思った。このひとはきつと、世の中のいろいろいるなところに隠されている、素敵なものを見つけ出すことが、とても上手なのだ。それは、純粋な心を失なっていないからというよりも、たぶん、歳を重ねていくなかで、不純なものを見分ける方法を身に着けるようになったからなのではないだろうか。

まるで少女みたいに微笑む彼女を見てみると、諸田は、自分の気持のなかにも、やさしいものが生まれていることに気がついた。それは、さつき夜の空気が入り込んでしまったみたいに、今度は、彼女のまわりに漂っているなにか温かくやさしいものが、心のなか

みんな、ひとり？

に流れ込んできたのかもしれない。

「あなたはきつと、素敵なものを見つけ出すという才能がおりな
んですね。それに、とっても、おやさしい」

諸田は感じたことを、そのまま口に出していた。

「まあ、こんなおばあさんをおだてても、どうにもなりませんよ。
でもね、素敵なものについては、若い頃から、いつつも探してきた
から、少しでも自信はあるのよ」

そう言うのと、彼女は得意そうに微笑んだ。

「それじゃあ、これまでも、さぞかし素敵なものを、たくさん見
つけてこられたんじゃないですか」

「ところが、それがけっこう、こじつけばかりなの。『ものすご
くきれいな光』とか『気絶しそうな砂糖菓子』なんて、名前にばっ
かり凝ってみて、お友だちにもあきれたりして。でも、そのお
友だちの声だけは、本当に、とっても素敵な声をしてたわ。あの
子の声が、わたしの一生の中で、いちばん素敵なものだったのかも
しれないわ」

「仲のいいお友だちだったんですね」

話している途中から、老婦人の表情はなぜか曇っていった。

「そう、だったの。その子とも、もうずいぶん会っていないわ。も
う何十年でしょう。そうなってしまうたのも、わたしが信じて待っ
てあげることができなかつたからなの。だから、わたしはそのこと
に気がついてからずっと、もしも、だれかを待たなければならなか
ったり、信じてあげなきゃいけないときには、わたしが待ったり信
じたりしてあげられるうちは、必ずそうしようって、決めているの
よ、……なんてね」

最後は冗談めかして笑っていたが、彼女の瞳は、すこし潤んでい
るみたいに見えた。

そのとき、店の扉が開いた。

老婦人は諸田に向かって、「ほらね」と、声を出さず、口だけを

みんな、ひとり？

動かす。

諸田は、コーヒーを淹れるための湯を沸かさなければと、キッチンへ戻っていった。

みんな、ひとり？

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4997d/>

みんな、ひとり？

2009年3月24日10時34分発行